

6.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは私たちにとって馴染み深い昆虫類の確認状況や、水域と陸域との接点である水際に特徴的な種の確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

【ゲンジボタルとヘイケボタルの確認状況】

（陸上昆虫類等調査）

- **ゲンジボタルを1河川、ヘイケボタルを3河川で確認**

ゲンジボタルは、今回調査では、四国地方の肱川のみ確認で、前回調査の3河川よりも確認された河川数が減少した結果となりました。

一方、ヘイケボタルについては、今回調査では、北陸地方の姫川、黒部川及び四国地方の肱川で確認され、前回調査と比較して確認河川数に増減はありませんでした。

なお、四国地方の肱川では両種とも確認されています。

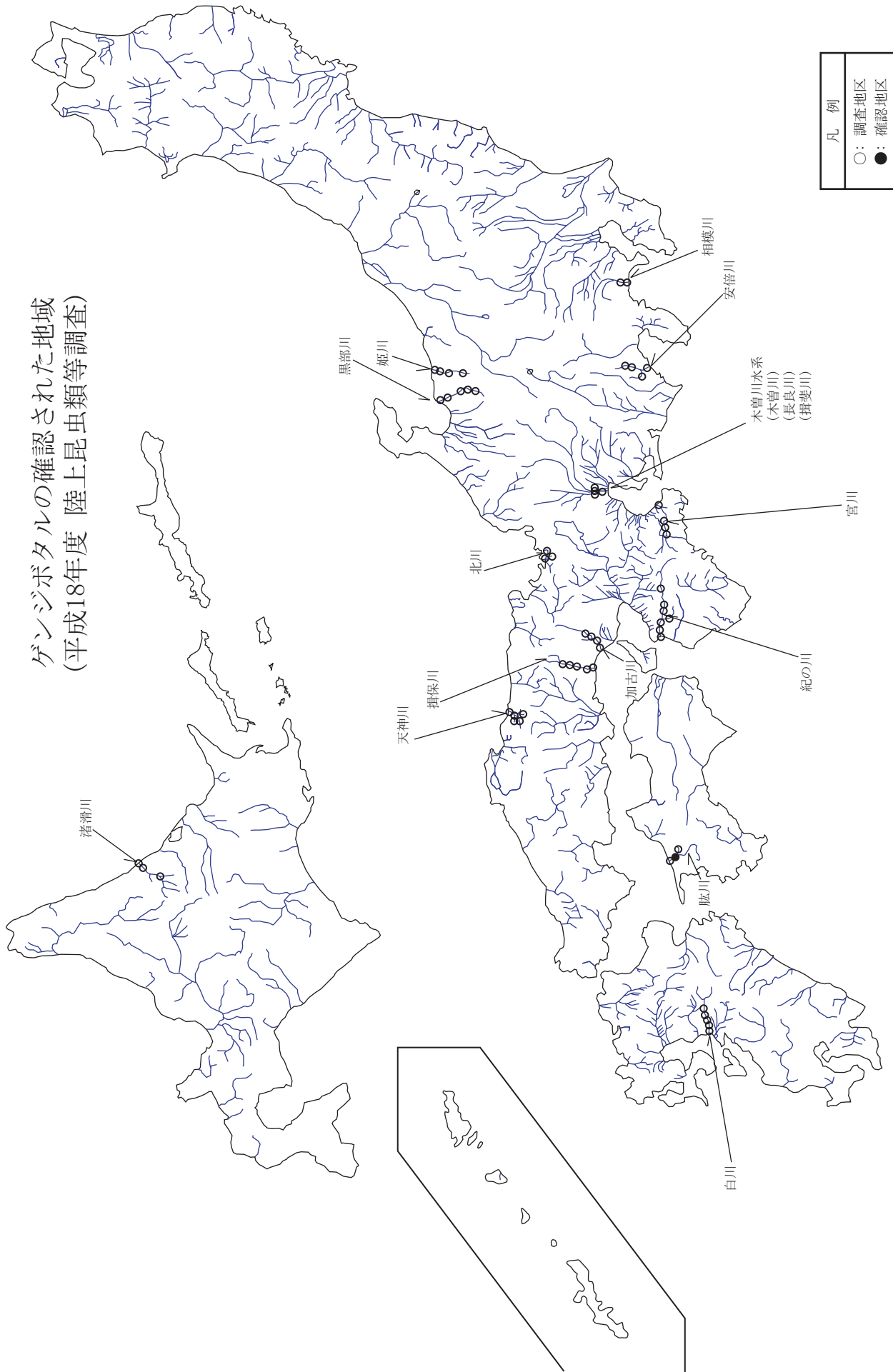
（資料掲載：6-6～6-7、6-42～6-43 ページ）

確認河川数の比較（対象河川：16河川）

種類	1巡目	2巡目	3巡目	4巡目
ゲンジボタル	0河川	2河川	3河川	1河川
ヘイケボタル	1河川	5河川	3河川	3河川

ゲンジボタルとヘイケボタルは全国的（ゲンジボタルは北海道を除く）に生息していますが、ゲンジボタルが主に山地の清流などに生息するのに対し、ヘイケボタルはより流れの緩やかな小川や用水路など平地や丘陵地を主な生息場とする傾向がみられます。ゲンジボタルは、各地で飼育や放流が行われていますが、発光のパターンや産卵習性のほか、遺伝子レベルでも顕著な地理的な変異が認められています、そのため、地域を越えた安易な放流は、遺伝的な多様性の喪失や生態系への影響が懸念されています。

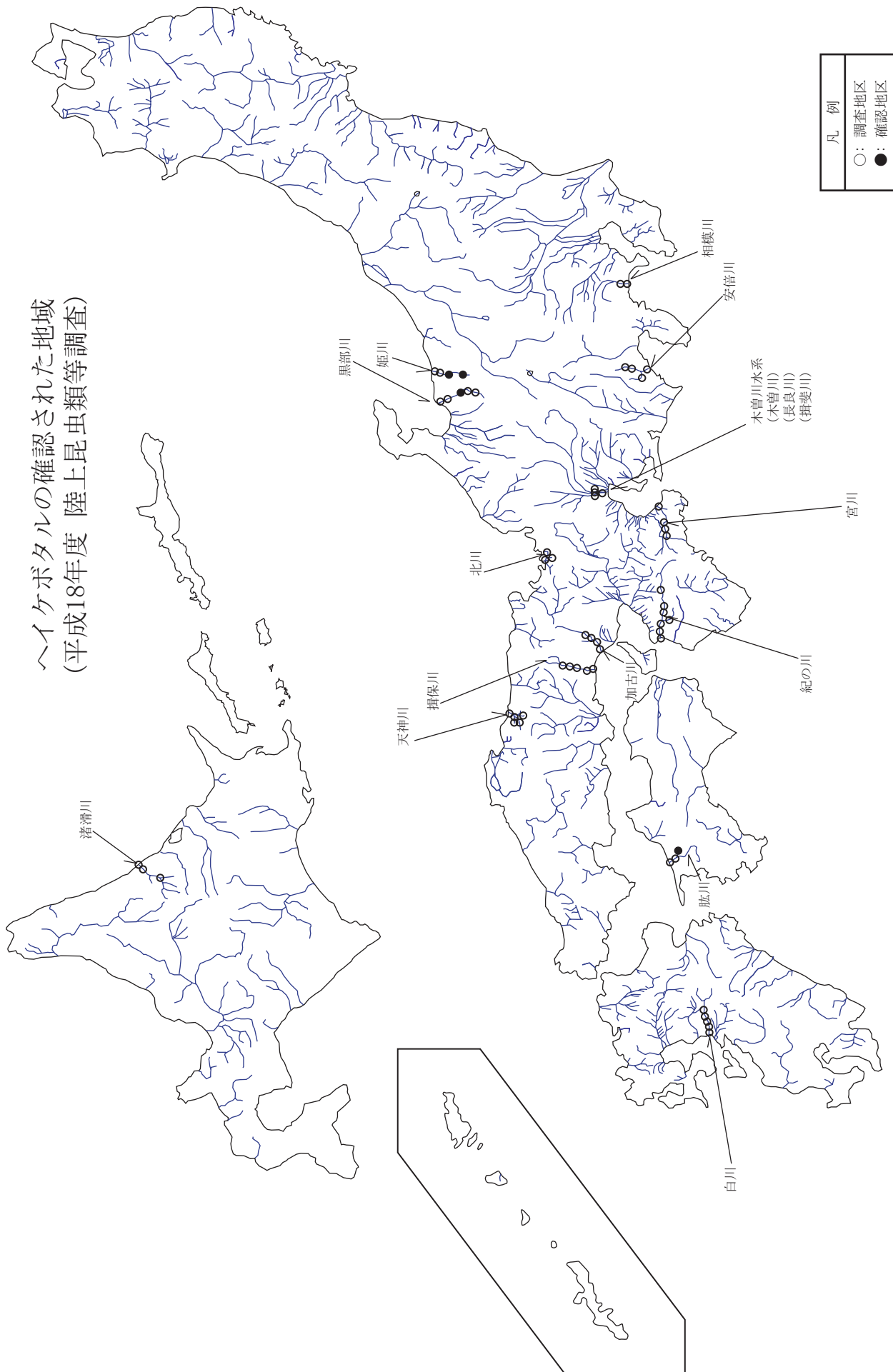
ゲンジボタルの確認された地域
(平成18年度 陸上昆虫類等調査)



凡 例	
○	調査地区
●	確認地区

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
 木曾川水系については下流側事務所の夏季と
 秋季のデータをとりまとめている。

ヘイケボタルの確認された地域 (平成18年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
 木曾川水系については下流側事務所の夏季と秋季のデータをとりまとめている。

【オオムラサキの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

● オオムラサキは確認されず

オオムラサキは、今回調査では確認されませんでした。前回調査では北陸地方の黒部川と中部地方の安倍川の2河川から確認されましたが、今回は確認されませんでした。

(資料掲載: 6-42~6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 16 河川)

種類	1 巡目	2 巡目	3 巡目	4 巡目
オオムラサキ	0 河川	0 河川	2 河川	0 河川

オオムラサキは大型のタテハチョウで、北海道南西部から九州までの広い範囲に分布しており、日本の国蝶としても有名です。幼虫は河畔林を形成することの多いエノキやエゾエノキを食樹としています。成虫は初夏に出現し、クヌギやコナラなどの樹液、熟した果実等に集まります。雑木林などの生息環境の減少による本種への影響が懸念され、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧に指定されています。

【コオニヤンマの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

- **コオニヤンマを 6 河川で確認**

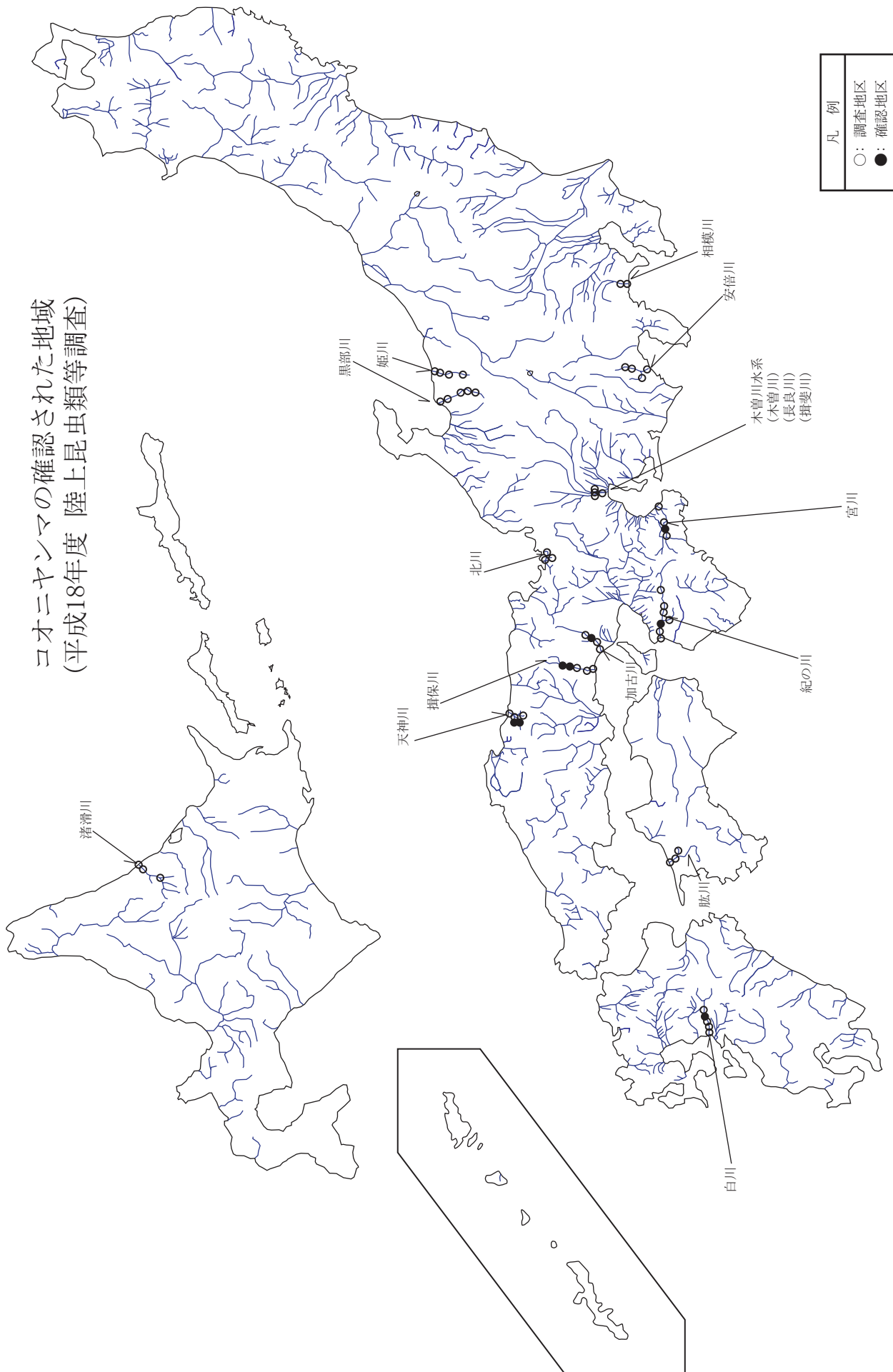
コオニヤンマは、今回調査では、中部地方から九州地方にかけての 6 河川で確認され、前回調査の 2 河川よりも確認河川数は増加しました。近畿地方の揖保川では前回調査に引き続いての確認で、中部地方の宮川、近畿地方の加古川、九州地方の白川では初めての確認となりました。
(資料掲載: 6-10、6-42~6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 16 河川)

種類	1 巡目	2 巡目	3 巡目	4 巡目
コオニヤンマ	0 河川	2 河川	2 河川	6 河川

コオニヤンマは、国内では最大のサナエトンボ類で、各地の平地から山地の河川に広範に生息する種です。生息には、浅瀬や流れの緩やかな砂泥底、水際の植物などの環境条件が必要です。大きな体長に比較して小さな頭部と長い後脚を持つ形態的な特徴があります。

コオニヤンマの確認された地域
(平成18年度 陸上昆虫類等調査)



凡 例	
○	調査地区
●	確認地区

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
木曾川水系については下流側事務所の夏季と秋季のデータをとりまとめている。

【ヒヌマイトトンボの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

• ヒヌマイトトンボは確認されず

ヒヌマイトトンボは、今回調査では確認された河川はありませんでした。今回調査を実施した河川では、いずれもこれまでの調査でも確認されていません。

(資料掲載: 6-42~6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 16 河川)

種類	1 巡目	2 巡目	3 巡目	4 巡目
ヒヌマイトトンボ	0 河川	0 河川	0 河川	0 河川

本種は本州の主に太平洋岸の大河の河口部周辺に分布し、ヨシやマコモなどの抽水植物が繁茂する汽水域が生息域です。

本種が主に生息する河口域は、塩水と淡水の微妙なバランスにより維持されている汽水域と呼ばれる環境である一方、改修や埋め立て、船舶の往来など人間活動による干渉を強く受ける場所でもあります。

本種は、近年分布域が限られてきており、開発工事などの影響が懸念されることから、今後の生息状況を監視していく必要があると考えられます。

環境省のレッドデータブックにおいて、絶滅危惧 I 類に指定されています。

- **カワラバッタを4河川で確認**

砂礫河原によく見られる群落に生息するカワラバッタ、カワラハンミョウ、ミヤマシジミ、ツマグロキチョウ、アオモンギンセダカモクメ、ギンモンセダカモクメ、ダイセンセダカモクメ、ヨツボシアカツツハムシ、ウスグロチビツツハムシの確認状況を整理しました。

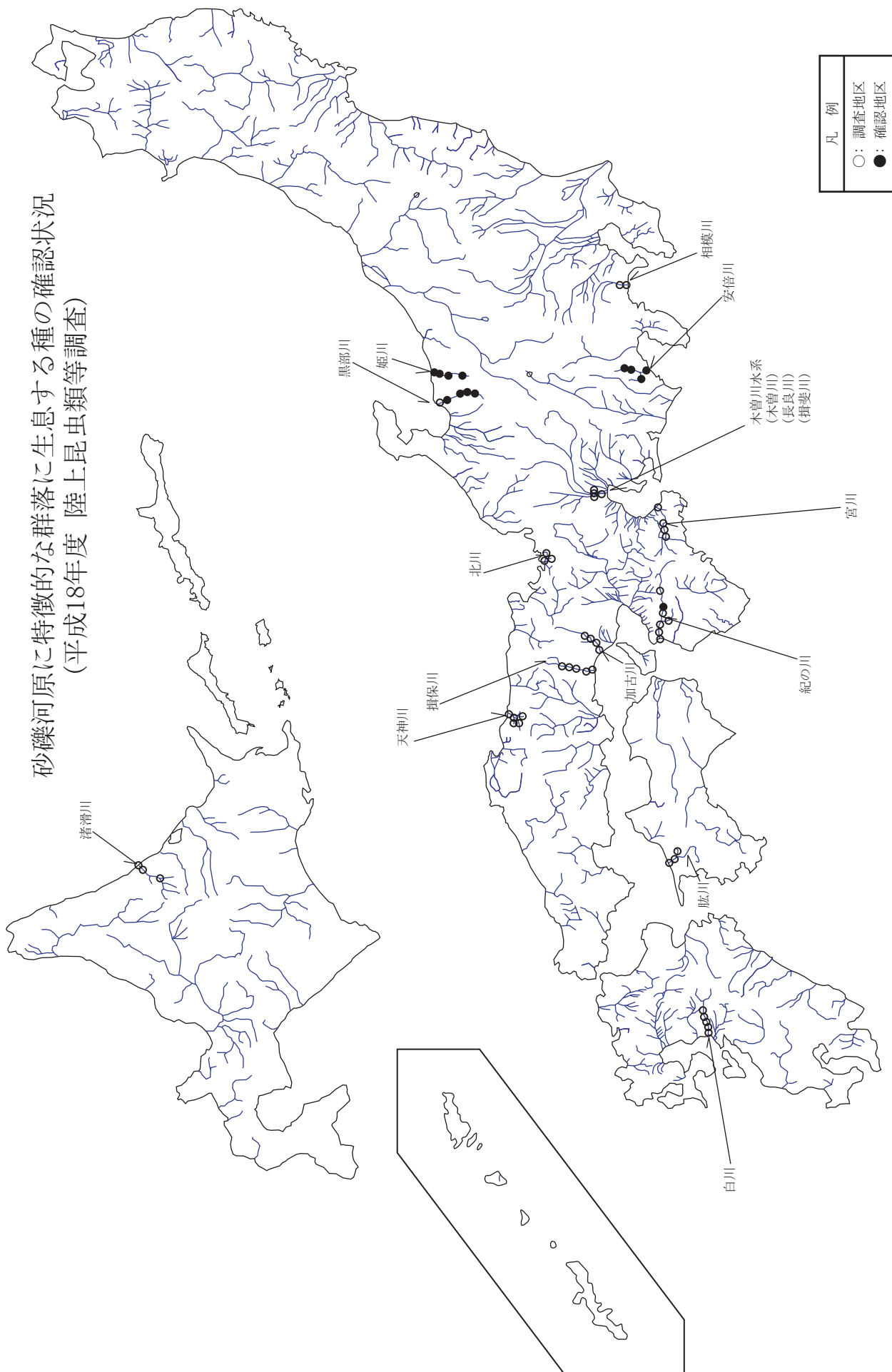
今回調査では、カワラバッタが4河川で確認されたほかは、ミヤマシジミが2河川、カワラハンミョウ、ツマグロキチョウ、ヨツボシアカツツハムシがそれぞれ1河川で確認されています。

河川別に見ると、北陸地方の姫川及び中部地方の安倍川で、9種のうち3種が確認されました。
(資料掲載：6-13、6-42～6-43 ページ)

砂礫河原に特徴的な群落に生息する9種の分布状況から、砂礫河原の発達と分布状況を把握することを目的としました。カワラバッタ以外の種はいずれも確認頻度は低く、アオモンギンセダカモクメ、ギンモンセダカモクメ、ダイセンセダカモクメはこれまでの調査でも確認されたことがなく、ウスグロチビツツハムシは今回調査では確認されていません。

砂礫河原に特徴的な植物群落は、自然状態では洪水等の攪乱を受けやすい不安定な場所に多く成立する群落ですが、年々、河川整備が進み、河床環境が安定してきたことから、自然の攪乱を受ける砂礫河原を中心とした生息環境が減少するとともに、対象種も減少してきていることが考えられます。

砂礫河原に特徴的な群落に生息する種の確認状況 (平成18年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
 木曾川水系については下流側事務所の夏季と
 秋季のデータをとりまとめている。

● **フタモンクビナガゴミムシ、ババヒメテントウを 10 河川で確認**

湿生群落によく見られるエサキアメンボ、アオヘリホソゴミムシ、フタモンクビナガゴミムシ、ババヒメテントウ、ムモンチャイロテントウ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ワタラセミズギワアリモドキ、シロツトガ、ヨシツトガ、ヨシカレハ、キスジウスキヨトウ、オオチャバネヨトウの確認状況を整理しました。

これらの湿生群落に特徴的な昆虫類の出現河川数を種別にみると、フタモンクビナガゴミムシ及びババヒメテントウが 10 河川と最も多くの河川で確認され、次いでヨシツトガが 9 河川、アオヘリホソゴミムシが 8 河川で確認されています。

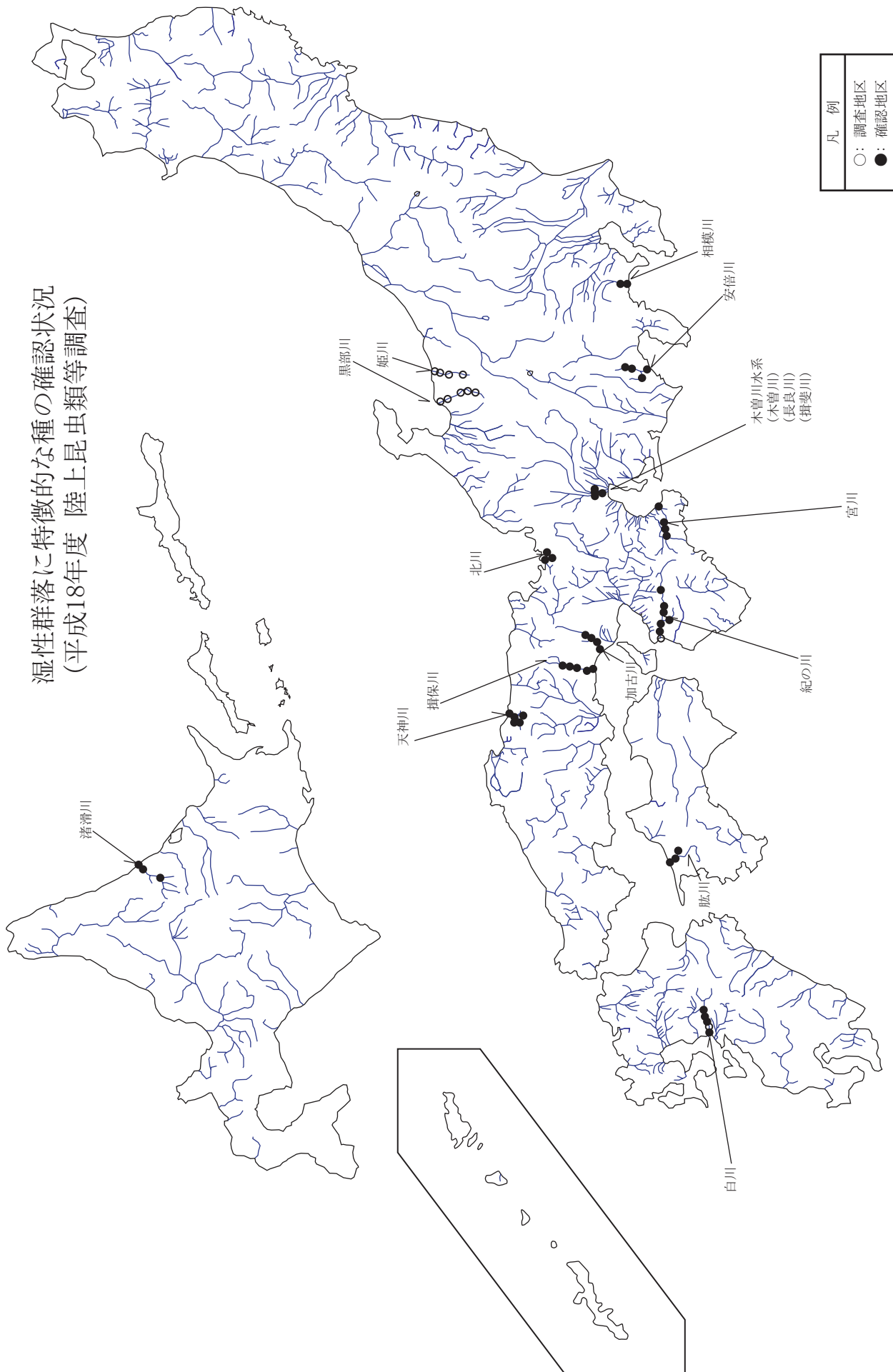
(資料掲載：6-15、6-44～6-45 ページ)

ヨシやガマを代表とする湿生群落に特徴的な 12 種について確認状況を整理し、湿生群落の広がりや健全性の把握を試みる材料としました。

種別では主にヨシ群落に生息するフタモンクビナガゴミムシとババヒメテントウが最も多くの河川で出現し、今回とりまとめを行った 16 河川のうち約 6 割の 10 河川から確認されています。一方で、エサキアメンボならびにムモンチャイロテントウ、ワタラセミズギワアリモドキ、キスジウスキヨトウ、オオチャバネヨトウは確認された河川はありませんでした。

ガマ属を主な食草とするガ類では、シロツトガが 2 河川から確認されたものの、キスジウスキヨトウ及びオオチャバネヨトウは確認されていません。

湿性群落に特徴的な種の確認状況 (平成18年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
 木曾川水系については下流側事務所の夏季と秋季のデータをとりまとめている。

● コムラサキを 15 河川で確認

河畔林によく見られるオオムラサキ、ゴマダラチョウ、コムラサキ、ミドリシジミ、オナガミズアオ、タマムシ、ヒシモンナガタマムシ、ヤナギハムシ、ハンノキハムシ、ハンノキカミキリの確認状況を整理しました。

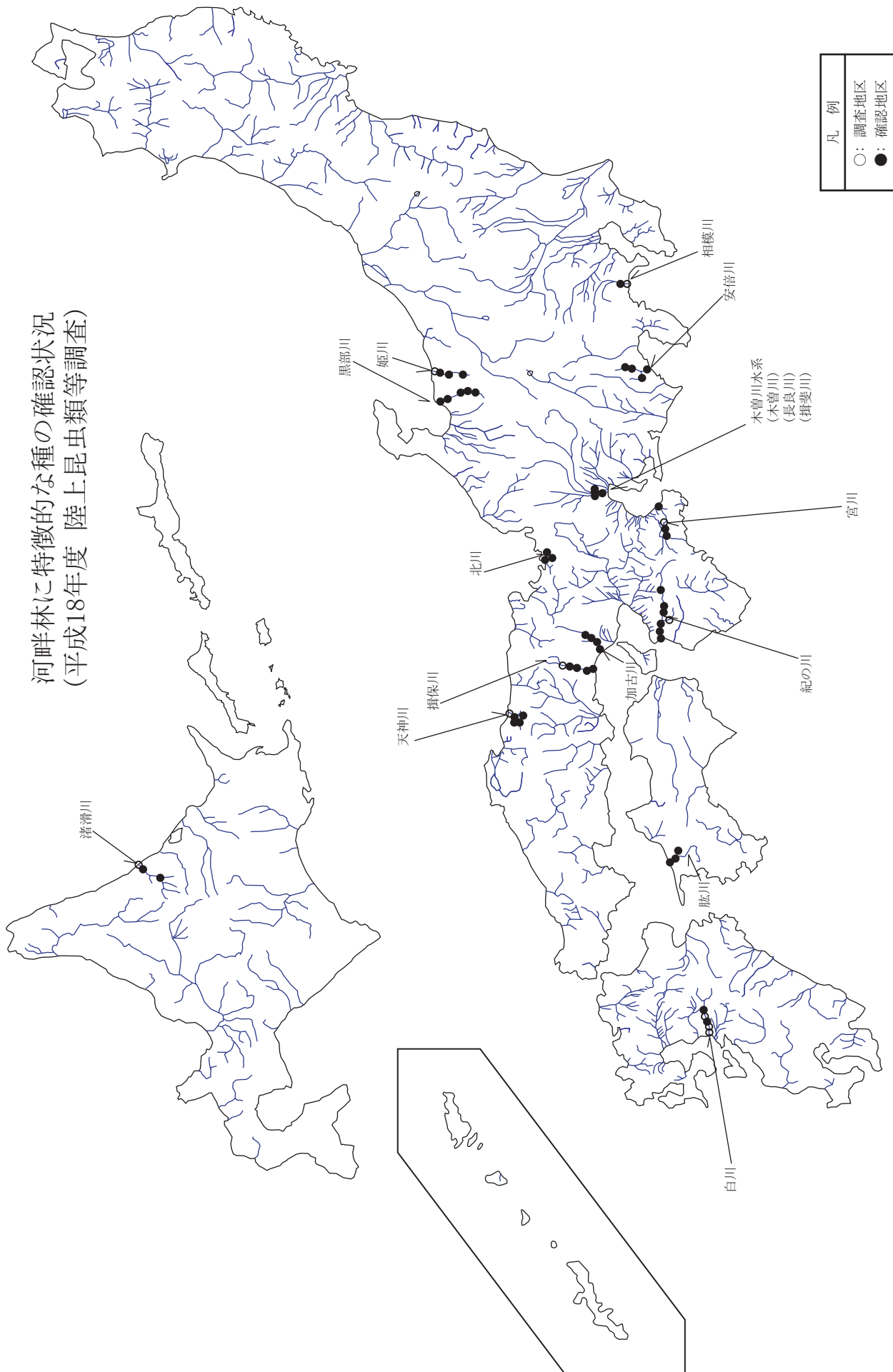
種別ではヤナギ類を食草とするコムラサキが北海道地方から九州地方までの 15 河川で、エノキ類を食草とするゴマダラチョウが関東地方から九州地方の 14 河川で確認されました。
(資料掲載：6-17、6-46～6-47 ページ)

河畔林（エノキ群落やムクノキ群落、ヤナギ群落、ハンノキ群落など）に特徴的な 10 種の昆虫類の確認状況から、河畔林の発達状況や良好さの検討を試みました。

今回とりまとめを行った 16 河川のうち、確認河川数が多かった種は、コムラサキの 15 河川、次いでゴマダラチョウの 14 河川、タマムシの 9 河川でした。

近年、各地で国外外来種が河川敷に侵入し、これらの自然植生である河畔林が外来植物群落に置き換わる事例が増加しています。今後も外来植物群落の拡大による植生群落の多様性及び群落内の種多様性の低下が懸念されることから、分布動態を把握するためのモニタリングが必要と考えられます。

河畔林に特徴的な種の確認状況 (平成18年度 陸上昆虫類等調査)



凡 例	
○	調査地区
●	確認地区

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
 木曾川水系については下流側事務所の夏季と秋季のデータをとりまとめている。

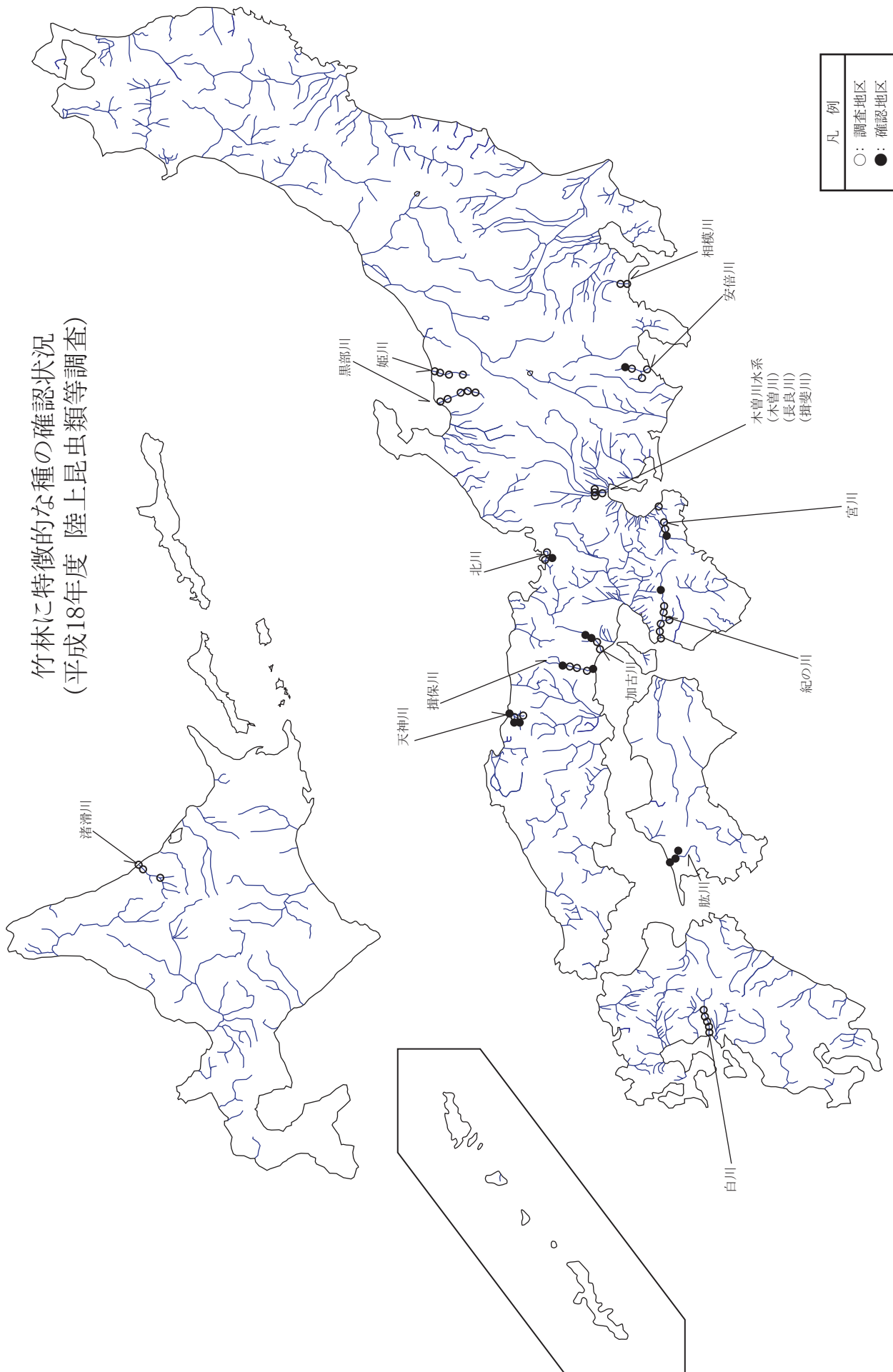
● **タケカレハを 5 河川で確認**

竹林によく見られるタケカレハ、ベニカミキリおよびタケトラカミキリの確認状況を整理しました。種別では、タケカレハが中部地方から中国地方にかけての 5 河川、ベニカミキリが中部地方から四国地方にかけての 4 河川で確認されましたが、タケトラカミキリは確認されませんでした。
(資料掲載：6-19、6-46～6-47 ページ)

竹林（マダケ、モウソウチク、ハチク）に特徴的な 3 種の昆虫類の確認状況から、竹林の広がりや良好さの把握を試みました。

一般的に竹林は関東以西において発達した群落を形成していると言われていますが、今回調査では関東地方からは確認されず、中部地方以西での確認でした。

竹林に特徴的な種の確認状況
(平成18年度 陸上昆虫類等調査)



凡 例	
○	調査地区
●	確認地区

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。
木曾川水系については下流側事務所の夏季と秋季のデータをとりまとめている。